

遊具の譲り合いの場面にみられる幼児期のケアの発動

—ノディングズのケアリング論を手がかりとして—

山口 美 和

1. 問題の所在

本稿の目的は、保育の場で幼児同士のあいだにみられる相互作用を手がかりとして、幼児期におけるケアリングの発動の様態を明らかにすることである。

ひとは、誰かからケアを受けなければ生きていけない脆弱な状態で生まれてくる。その傷つきやすい存在が、やがて自分がケアされていることに気づき、自分自身をケアすることができるようになり、いつしか他者をケアする存在へと成長していく。家庭生活や社会生活を営む主体へと成長していく過程において、さまざまな場面で他者へのケアが求められることになる。ひとはケアする主体としての能力を身につけながら、社会的存在として成長していくといえよう。

幼児教育や保育の場でも、園生活全体を通して、子どもたちがケアの主体として成長していくことがめざされている。たとえば、新しい保育所保育指針では、領域「人間関係」の内容として、「友達と積極的に関わりながら喜びや悲しみを共感しあう」「自分の思ったことを相手に伝え、相手の思っていることに気付く」「友達と一緒に活動する中で、共通の目的を見だし、協力して物事をやり遂げようとする気持ちを持つ」「身近な友達との関わりを深めるとともに、異年齢の友達など、様々な友達と関わり、思いやりや親しみを持つ」ことが挙げられている。

幼児は、一方で自分自身も保育者や保護者からたえずケアされることによって身体的な健康と精神的な安定感を得ながら、他方で、成長に応じて自分よりもか弱い者や小さい者を気遣いケアするという、二重のケアリング関係を生きている。はじめは自分の関心だけに目を奪われていた幼児も、保育所や幼稚園で集団生活を営む中で、徐々に他者の期待や求めに耳を傾けるようになり、他の子どもをケアできるようになっていく。この点で幼児期は、その後のケアリング行動の基礎を形づくる、重要な時期であると考えられる。

とはいえ、ひとが他者からケアされる経験を積み重ね、ケアされることの喜びや安らぎを知ることと、そのひとが他者を気遣い、自らの手でケアを実践できるよ

うになっていくこととのあいだには、なお隔たりがあるといわねばならない。ケアされる側であった幼児が、他者をケアすることに目覚めていくきっかけはどこにあるのだろうか？

たとえば、遊びを通しての友だちとのやりとりの中でおもちゃを譲りあったり、転んだ友だちをいたわったり、人形を寝かしつけるためにそっと毛布を掛けたりする行動は、幼児にも見られる。これらは他者に対するケアの萌芽と考えられるが、そのような行動は、何に触発されて起こっているのだろうか？

本稿は、こうした問題意識をもとに、幼児のケアリング行動の発動の様態を考察しようとするものである。幼児の具体的な行動を分析するための素材として、幼稚園で実際に見られた幼児同士の相互作用のうち、遊具の貸し借りや譲り合いの場面を記録したプロセスレコード¹を使用する。

また、幼児のケア行動の分析にあたり、ネル・ノディングズの「自然なケアリング」及び「倫理的なケアリング」に関する議論を批判的に検討しつつ、その一部を分析の補助線として援用する。ケアの倫理について論じているノディングズは、「目の前の他人のために行為したいという衝動²」は、それ自体生得的なものであり、誰もが持つその衝動は、ケアする関係が継続される中で発達していくものだと主張する。ノディングズは、自然な衝動に従って行なわれるケアを「自然なケアリング」と呼び、「すべてのケアリングを可能にするもの」として位置づけている。もし、彼女の言うように生得的な衝動がケアに関与しているとすれば、幼児の行動にもその萌芽が見られるはずである。

そこで以下ではまず、ノディングズの議論を踏まえて、本稿における「ケア」の概念について操作的に定義した上で、幼児の相互作用場面の分析を行うことにする。

2. ケアリングの定義：ノディングズの「自然なケアリング」を援用して

「ケア」とはどのような行為か？あるいは、他者を「ケアしている」とはどのような状態を指すのだろうか？本稿では、ケアするという出来事の成立を、幼児の具体的な行動の中から見出すことをめざしている。そのため、自分の行動の意図や明確な意思を言語的に表現することが難しい幼児にも適用することが可能なケアの定義が必要となる。そのための足がかりとして、ネル・ノディングズが論じている「自然なケアリング」の概念について検討しよう。

ノディングズによれば、ケアリングは「専心没頭（engrossment）」と「動機の転

移 (motivational displacement) 」の二つの要素によって特徴づけられる。「専心没頭」とは、「ケアされるひとに耳を傾け、かれの物語ることに喜びや苦しみを感じようとして」³、相手の幸福を願い、気遣うことである。また、「動機の転移」とは、ケアするひとが、ケアされるひとの関心の中へ入り込むことで、相手の欲求を自分のもののように感じることである。これらはいずれも、ケアするひとの心的な状態である。相手へと向かって表出される配慮や行動の背後に、この二つの原理が存在することがケアの特徴とされている。

このようにケアは、相手のために行動することを含んでいながら、表面にあらわれたその行動面のみで判断されるものではない。むしろ、ノディングズにとってケアの本質的な部分は、ケアするひとが相手に向かうときの心的なありようや、行為を支える内的な動機にあるといえる。つまり、いかなる行為であろうと、ケアされるひとの視点をもって行なわれることが重要なのである。ただし、ここでノディングズが言う「ケアされるひとの視点をもつ」ということは、その人が置かれている立場を「想像」して、自分がその立場に置かれたらどうしたいと願うだろうかと考えることではない。

たとえば、ノディングズは次のように述べる。

「ケアリングには、自分自身の個人的な準拠枠を踏み越えて、他のひとの準拠枠に踏み込むことが含まれている。ケアするとき、わたしたちは、他のひとの観点や、そのひとの客観的な要求や、そのひとがわたしたちに期待しているものを考察する。」⁴

自分自身の準拠枠を踏み越える、ということは、通常自分が世界を見るときに使用している価値基準を括弧に入れて保留したうえで、相手のまなざしや価値観を内面化して世界を見るという意味であると考えられる。このとき、ケアするひとは、いわば相手の目や耳と一体となって、相手と同じように見、聴き、感じるのだという⁵。このようなケアの例として、母親が自分の赤ん坊の要求を認識や分析ぬきで直観的に感じとることが挙げられている。

「母親が赤ん坊と感情を共有するのは、まったく当然なことである。…わたしたちはその赤ん坊に回答して、どこか赤ん坊の具合が悪いのだなとを感じる。どこか具合が悪い、この感情が赤ん坊の感情であり、わたしたちの感情である。その感情を受け容れ、分かち合うのである。…問題の定式化や解決を出発点とするのではなく、感情の共有を出発点とするのである」(傍点原著者)⁶。

母親は泣いている子どもを目の前にして、「自分自身の苦痛を取り除きたいと思うのと同じように」⁷、わが子の苦痛を取り除きたいと願う。それと同じく、自然に目の前の他者に対して「なにかしたい」と感じるということが、「自然なケアリング」の根本的な状況である。このようにして成立する「自然なケアリングが倫理的なものを可能にする」ものとして位置づけられている⁸。

「自然なケアリング」に関するノディングズの議論には、いくつかの疑問も浮かぶ。その疑問点については、幼児の具体的なケア行動を分析したのち、詳細に検討することにするが、ノディングズのここまでの主張を仮説的に受け入れるなら、ケアの主体としての成長過程にある幼児の行動の中にも、「自然なケアリング」が見られると想定される。主体の内側から湧いてくる欲求に基づく「自然なケアリング」はあらゆるケアの前提である以上、原初のケア形態と考えられるからである。

このあとの分析のためにさしあたり必要なのは、どのような行為をケアとして捉えるかという一定の視点である。ケアを決定づけるのはケアするひとの内的動機であるとしても、ノディングズも指摘しているように、「傍観者は、この決定的な動機がわからないし、態度に現れたサインを読み違えるかもしれない」⁹。したがって、ケアリング行動を判別する何らかの外面的な指標は必要である。

ノディングズは、外面的な行動からケアを識別するための基準として、「第1に、行為が…ケアされるひとにとって、好ましい結果を生じるか、あるいは、かなりそれに近く思われるか、第2に、ケアするひとが、その行為において、特徴的な可変性を発揮すること——そのひとがケアされるひとのために規則に縛られない様式で行為するということ」¹⁰の二点を挙げている。第二の基準は、「～すべし」という一般的な原理や規則に従ってケアするのではなく、ケアされるひとの置かれている個別な状況やニーズに応じて、ケアの様態を柔軟に組み替えていくことができるかどうか、ということを指している。

以下、本稿では、他者へと向かう幼児の行動においてこの二つの条件が認められる場合に、幼児から他者へのケア行動が成立したとみなすこととする。

3. 幼児のケアリング行動の分析

保育場面で見られる幼児のケアリング行動を、具体的に検討していこう。本稿の分析に使用するのには、幼稚園での教育実習において学生が実際に出会った場面を、実習後に想起して再構成した「プロセスレコード」と呼ばれる記録である。以下に示すの

は、幼児同士の相互作用場面がとりあげられたプロセスレコードである。表中の下線部は特に注目される言動である。

(1) 年中児にみられるケアリング行動～おもちゃの貸し借り～

【プロセスレコード 1】

園児の情報	学年：年中	性別：男	園名：C幼稚園
園児の言動	私（学生）が感じたり、考えたりしたこと		私（学生）の言動
<p>① Aくんが「ねえねえ」と話し掛けてくる。</p> <p>③ Nくんの使っているパトカーのおもちゃをじっと見る。</p> <p>⑥ 私の言葉に頷くが、「貸して」となかなか自分から言おうとしない。</p> <p>⑪ Nくんは「嫌だ」と答え、引き続き遊び続ける。Aくんは悲しそうにうつむく。</p> <p>⑭ しばらくしてから、Nくんが自分から「貸してあげる」とAくんの元へ来る。</p> <p>⑰ Aくんは小さな声で「ありがとう」と答える。</p> <p>⑲ Nくんは「うん」と答え、別のおもちゃで遊び始めた。</p>	<p>④ もしかして、あのパトカーのおもちゃで遊びたいのかな。</p> <p>⑦ 自分から言えないんだな。</p> <p>⑨ Aくんの気持ち、Nくんに伝わるといいな。</p> <p>⑫ 困ったな。NくんにAくんの気持ちは分からなかったのかな。</p> <p>⑮ Aくんの気持ちが伝わったんだ。良かった。</p>		<p>② 「どうしたの？」と尋ねる。</p> <p>⑤ 「パトカー使いたいの？」と声をかける。</p> <p>⑧ 「先生と一緒に“貸して”って言ってごようか？」とAくんと手をつないでNくんのもとへ行く。</p> <p>⑩ NくんにAくんの気持ちを伝える。（Aくんと手をつないだまま）</p> <p>⑬ 「パトカーじゃなくて、他の車は？」とAくんに聞くが、<u>本人は首を振って否定</u>。しばらく2人で手をつないでいた。</p> <p>⑯ 「良かったねAくん。Nくんにちゃんと“ありがとう”って言える？」とAくんに声をかける。</p> <p>⑱ 「Nくんもありがとうね。Nくん優しいなあ」とNくんにも声をかける。</p>
私（学生）がこの場面から学んだこと NくんにAくんの気持ちが伝わって、友だちを思いやる優しい一面が見られた。			

この事例は、4歳の男児Aが、別の男児Nが遊んでいるパトカーのおもちゃをほし

がり、保育者（実習生）に訴えてきた場面である。最初はおもちゃを貸すことを拒んだNだが、⑭のシーンで自分からすんでAにおもちゃを貸す。自分の遊んでいたおもちゃを相手に手渡すというNの行動は、この場面では、おもちゃを手に入れられず悲しんでいたAへのケアとして機能している。

この場に居合わせた実習生は、Nに「Aくんの気持ちが伝わって」、おもちゃを貸すという、「友だちを思いやる」行動が見られたと総括している。実習生は、保育者としてこの場面を観察するときに、そもそもAの「気持ちが伝わる」とはどういう事態を指しているのか、仮にAの気持ちがNの行動を変容させたとすればそれはなぜなのか、といったことは読み飛ばして、Aの行動を一挙に「思いやりある行動」として意味づけている。このように保育の現場では、他者に対するその子どもの行動から、相手への「思いやり」や「やさしさ」を直接的に感受して受け止めることが、保育者の「自然」な反応だといえるのかもしれない。

しかし、実際のところ、なぜ園児Nがおもちゃを貸す気になったのか、その内的な動機までは、本来このプロセスレコードの記述だけではわからない。

本稿でこの場面の分析を通してあらためて考えてみたいのは、はじめはおもちゃを貸すことを頑として拒んだ幼児が、その数分後にあっけなくおもちゃを貸すに至るといふ、この二つの出来事のあいだに見られる断裂である。プロセスレコード中の⑩（下線部）で遊びつづけるNの姿には、自分以外の他者への気遣いや配慮の態度は感じられない。そのNが、不意に自分のおもちゃを友だちに差し出すのである。この間、AとNとの間には、相互作用らしきものが存在しないように見えるのに、Nの行動が変化したのはなぜか。

この問題について考察を行うため、他の年齢の子どもたちの同様の場面における相互作用を検討してみよう。年齢毎の反応の違いを比較してみると、年齢による周囲の他者と幼児との関係の変化が、ケアの様態にどのように影響を与えているかが見えてくると思われる。

（2）年少児同士のおもちゃの貸し借りの場面でみられる行動

遊びに夢中になっている子どもが、今まさに遊びに使っているおもちゃや遊具を他の子どもに譲るのは、保育者が考えている以上に難しいことである。別の場面での幼児同士のやりとりを見てみよう（プロセスレコード2）。

年少児におけるブロックの取り合いの場面である。数少ないタイヤのついたブロック

を、園児AとBが奪い合っている。途中で保育者(実習生)が介入し、ことばを介した交渉を促してみるが(表中⑩下線部)、お互いどうしても自分が使いたいと主張したため、折り合いがつかなくなっている。

【プロセスレコード 2】

園児の情報	学年：年少 性別：男女	園名：S幼稚園
園児の言動	私(学生)が感じたり、考えたりしたこと	私(学生)の言動
①Aちゃんがタイヤ付きのブロックで車を作って遊んでいる。		
②Bくんがやってきてタイヤを無理矢理取ろうとする。		
③Aちゃんが「勝手に使わないで!」と言う。		④2人のもとに行き、「どうしたの?」と声をかける。
⑤A「いま、車作ってるのに、Bくんがタイヤ勝手にもっていこうとする」と言う。Bくんは黙っている。	⑥他のタイヤはもうないのかな?と思う。	⑦Bくんに「もうタイヤなかったの?」と訊いてみる。
⑧B「うん」	⑨「貸して」など、Aちゃんに聞けば貸してくれるのでは?と思う。	⑩「Aちゃんに貸してって聞いてみたらどう?」
⑪B「Aちゃん、タイヤ貸して」		
⑫A「ダメ」	⑬どうしたら2人も気持ち良く遊べるのかな?と思う。	⑭「じゃあBくん、ちがうブロックで遊んでみよっか」と声をかける。
⑮B「やだ! タイヤが痛い!」と言う。	⑯どうしたらいいのか、と困ってしまう。	
⑰Cちゃんが来て「このタイヤ使っていいよ」と言う。	⑱「良かった」と思う。	⑲「Cちゃんにありがとうって言わなきゃね」と声をかける。
⑳B「ありがとう」 C「いいよ」	㉑これでBくんも楽しく遊ぶことができる、と思う。Cちゃんはとても優しい子だと思う。	

私（学生）がこの場面から学んだこと

年少さんなので、ゆずり合うことがあまりできなくて、すぐけんかになってしまっ
て大変だった。どう声をかければいいのか困ってしまった。

この場面では、最後にCという第三の子どもが、自分の持っていたブロックを差し出すことによって、AとBとの対立は解決へと向かう。Cの行動は、AとBに対するケアであるといえよう。しかし、AとBに限ってみれば、目の前の他者にとって好ましい結果をもたらす行動を選びとること——この場面で言えば、ひとつのブロックを「譲り合って使う」という行動——は、ついに見られないままである。

この事例に登場するのは年少児であるから、プロセスレコード1に登場する年中クラスの子どもたちと比較すると、社会的な発達のレベルが未熟であることは、もちろん考慮しなければならないだろう。一般的に3歳児は、他者の存在は知っているが、自分との区別があまり明確ではない自己中心的な世界を生きており、他者の立場を想像して理解することが難しいといわれている。実際、3歳児クラスでは、子ども同士のおもちゃの取り合いやいざごも頻繁に発生する。

先に示した第一の事例と比較すると、年少の子どもたちのあいだには、ケアリング関係はいまだ成立しにくいように思われる。

（3）異年齢児間のケアリング

次に異年齢児のあいだの相互作用を見てみよう。以下に示すのは、年少児と年長児とのやりとりである。ブランコの順番をめぐる応酬があるが、年長児から年少児へのケアが見られ、比較的スムーズに遊具を譲る姿が認められる。

【プロセスレコード 3】

園児の情報	学年：年少、年長	性別：男女	園名：U幼稚園
園児の言動	私（学生）が感じたり、考えたこと		私（学生）の言動
①年少さんのA、B、CちゃんとDくんが、「ブランコかーして」と叫ぶ。	②〇組（年長）さんの子どもたちは、ブランコを貸してくれるかなと心配する。		⑤年長さんたちに向かって「△組（年少）さんにも貸してくれないかなあ」と頼んでみる。
③年長E、F、G、Hくん「俺たちだってまだ乗ったばかりだもん」というようなことを口々に	④やっぱりダメか…と少し落ち込む。		

<p>言っていたがよく覚えていない。</p> <p>⑥Eくん「俺も乗りたいけど、貸してあげる。<u>順番決めるからジャンケン勝った人からね</u>」と言う。</p> <p>⑨年長さんの1人が「<u>ブランコ飽きた。あっち行って遊ぼうぜ</u>」と言い、みんなで裏山に向かって行く。</p> <p>⑩Eくんも一緒に行く。</p> <p>⑪年少さんは喜びながら全員ブランコに乗って遊ぶ。</p> <p>⑬Iちゃんがやってくる。「<u>ブランコかーして。</u>」<u>ブランコに乗っているA、B、CちゃんとDくんは、交替しようとしな</u></p> <p>⑮A、B、Cちゃん、Dくん全員がブランコから降りて、Iちゃんとかわってあげようとする。</p>	<p>⑦Eくんは、妹や弟がいるのかな。自分もまだ乗りたいのに我慢できるなんてすごいな。優しいな。</p> <p>⑫みんなブランコ使えるようになってよかったな。</p>	<p>⑧年少さんに向かって「みんな良かったね」と言う。</p> <p>⑭ブランコに乗っている年少さんに向かって「<u>みんなさっきブランコ乗れなくてどういう気持ちだった?</u>」と問いかける。</p>
<p>私（学生）がこの場面から学んだこと 保育者の一言で、子どもたちは変わることができることを知った。</p>		

記録した実習生は、年齢別の発達や成長の違いが良く出ている場面だと感じたため、この場面を取り上げたという。

年長児がブランコに乗っているところへ年少児がやってきて、ブランコを貸してほしいと言う。表中③では、年長児たちも、まだ自分が遊びたいという思いが強く、簡単に譲ってはくれない。しかし、年長児Eが「俺も乗りたいけど、貸してあげる」とブランコを譲るところから、両者の関係が動きはじめる。ブランコに乗っている年長児は4名、ブランコの前で待っている年少児も4名であり、Eが譲っただけでは、やはり3人の子どもが待たされることになるため、年少児同士での新たな譲り合いが必要になる。第二の事例でも見たとおり、年少児ではこの譲り合いが難しいが、Eが「ジャンケン勝った人から」という「ルール」を決めることで、ひとつしかないブランコを譲り合う知恵を年少児に示している。

さらに、そのやりとりの様子を見ていた他の年長児F、G、Hの態度にも、変化が表れる。「俺たちだってまだ乗ったばかり」だったはずの年長児だが、「ブランコ飽きた。あっち行って遊ぼうぜ」ということばを残して立ち去る。彼らが本当に「飽きた」のかどうかは確かめようがないが、この態度は一種の照れ隠しであるようにも思われる。たとえば大人も、電車やバスで他の人に席を譲るときに、譲られた相手が心理的負担を感じないように、（実際にはまだ乗車し続ける場合でも）自分はすぐに降りるかのように振舞ってその場を離れることがある。この年長児たちの行動は、（本人の内的な動機は確かめられないが）そのようなケースに似ているように感じられるのである。いずれにしても、彼らの視野に順番を待つ年少児たちが入っていることは確かであり、年少児に比べさまざまな遊びの選択肢を持つ年長児たちが、ブランコというひとつの遊具に拘泥せず、別の遊びへと移ることで、結果的に年少児たちにとって好ましい結果（＝全員がブランコで遊べる）をもたらしているといえよう。

ケアの連鎖は続く。別の子どもIがやってきて、ようやく全員でブランコを使って遊びはじめた年少児たちに向けて、ブランコを貸してと呼びかける。やはり、年少児は自発的に遊具を譲ることは難しいが、保育者（実習生）が、先ほどの年長児とのやりとりとそのときの気持ちを想起させることばをかけることにより、年少児たちはブランコを譲ることを、自分から行なおうとするようになっていく。

4. ケアの発動についての再解釈

(1) 「自然なケアリング」でも「倫理的ケアリング」でもなく

実際の幼児の相互作用を取り上げた三つの事例を検討してみると、幼児期のケアリング行動は、ノディングズの主張する「自然なケアリング」とは異なる様相を持っていることがわかる。

ノディングズによれば、ひとは「生得的に」他者をケアしたいという欲求をもち、それに従ってケアを行なうのであった。しかし、幼児はむしろ年齢が低いほど、遊びの途中で自分の領域に入ってくる他者を不快な異物のように扱っている様子が見られる。また、最後の事例にはっきりと示されているように、他者をケアしようとする態度は、保育者の介入や働きかけといった外的な動機づけによって促進される場合がある。この二点からも、少なくともケアリングの欲求が「自然に」湧き上がって来るかのようなノディングズの主張を下敷きにするには、幼児期におけるケアの出発点を記述するためには不適當であるように思われる。

ノディングズ自身も、「ケアしなければならない」ことがわかっている、「ケアしたい」とは感じられない場合があることを認めている。このように「自然な衝動」がケアを惹起しないとき、ケア関係を維持するのは、われわれの持つ「倫理的な理想」であるという。すなわち、他者をケアするという関係を、他のどのような関係よりも「善い」ものとして捉えている場合、目の前の他者に対してひとが感じる「ケアしなければならない」という内的な命令がそれである¹¹。このとき、ひとは気が進まないケアを行なうことを重荷に感じるかもしれないが、道徳的に善くありたいと願う自分の理想を維持するため、内なる私がケアの遂行を促すのである。私が「ケアしなければならない」と感じるとき、自己の自然な欲求と、他者から求められているケアの実践とのあいだには、明白な乖離が存在する。このように、ある種の倫理的努力を必要とするケアのことを、ノディングズは「倫理的ケアリング」と呼ぶ。

相互作用に現れた現象だけを見れば、事例に示した幼児の多くは、他者へのケアを自ら「したい」ものとしては感じていないといえる。では、幼児のケア行動にも、倫理的ケアリングの条件があてはまるのだろうか？

倫理的ケアリングの主体たりうるためには、他者をケアすることが道徳的に善いことであることを知った上で、「道徳的でありたい」という自己への欲求を持つことが必要である。しかし幼児期は、行動主体としての自己意識が形成される途上である。道徳的主体としての意識は5-6歳ごろにはかなり形成されるとはいえ、倫理的理想が大人と同じように働くとは考えにくい。コールバーグの道徳性発達段階を参照してみてもわかるとおり、幼児が「ケアしなければならない」という自己の内的な道徳的命を聴き、それに従うことを自らの意志で「選び取る」ことができるようになるまでには、なお多くの過程を要するであろう。

幼児期には他者に対する「自然なケアリング」はいまだ成立せず、また「倫理的なケアリング」を牽引する倫理的理想も形成途上である。ではなぜ、どのようにケアが発動するのか。もちろん、これまでにも見たように、親や保育者など身近な大人の働きかけが、ケアを発動させるひとつのきっかけとなることはありうる。しかし、この場合はなお外在的な要因に依存しており、きっかけが他律的なものにとどまっているかぎり、超越的な第三者が存在しないところではケアは発動しないかもしれないのである。

筆者は、この問題について考えるひとつの材料が、第一の事例に含まれていると考える。自己と他者との境界が曖昧で自己中心的な世界から脱していないために他者へ

の配慮が未分化な年少児から、他者へのケアが意識的かつ自発的に行なわれる年長児へと、ケアする主体としての意識が形成されていく過程が存在するとすれば、年中児はちょうどその中間点にあたる。このあいだのどこかで他者に対する自発的なケアが作動し始めるとすると、4歳前後に何らかの転換点があるはずである。

結論を先取りすれば、筆者は、ちょうどこの頃に他者に対する理解の転換点があることが、自発的なケアを発動させるひとつの要因となるのではないかと考えている。年少児がなお自己未分化性を残す「無記的」な世界を生きているのに対して、年中児は自己意識を明確に持ち、自分とは異なる他者の存在に気づきはじめる。他者の視線を意識しはじめ、羞恥心を感じるのもこの頃である。たとえば4歳頃の子どもは、絵を描いたり、作品を制作したりしているときに、大人が途中で覗き込もうとすると、制作途中の作品を隠すような行動が見られる。このような行動は、他者の「視線」を意識し、他者から自分がどのように見られているかを感じ取り、そのことに恥ずかしさを覚えていることを示している。

恐らくケアの発動は、この他者からの「視線」にひらかれる経験と無関係ではない。ここで再びノディングズの議論に戻り、彼女のケアリングにおける他者理解を再解釈したうえで、第一の事例を、幼児が他者からの「視線」にひらかれる経験として読み解いてみたい。

(2) 他者から到来する「自然な衝動」

他者へのケアが成立するためには、他者が何を望み、何をしてほしいと願っているかを、なんらかのかたちで「知る」ことが前提となる。目の前のひとをケアしたい、という欲求が浮かび上がる以前に、私たちはそのひとがなんらかのケアを必要としていることを理解していなければならない。ケアは、相手がそれを必要としているときに行なわれるからこそケアとしての意味を持つからである。誰かからのケアを必要としているとき、そのひとは何がしかの痛みや苦しみを抱えている。それゆえ、他者の痛みや苦しみをどのようにして「知る」のかということは、ケアの展開にとって避けずには通れない問題となる。

他者理解の問題について、ノディングズ自身はどのように考えているのだろうか。ノディングズは、ケアリングには他者と「ともに感じること (feeling with)」¹²が含まれると述べている。ノディングズはしかし、この「ともに感じる」ということは、決して「自分の人格を何ものかに投げ入れる」ことではないと注意を促している。他

者と「ともに感じる」とき、ケアするひとは自分を他者に「投げ入れる」のではなく、他者を「受け容れる (receiving)」のだという。「ともに感じること (feeling with)」は一般的には「共感 (sympathy)」と同義であるが、このことばの中に暗黙に含まれる「投影 (projecting)」の意味合いを、彼女は注意深く避ける。ケアするひとは能動的に相手の中に入り込もうとするのではなく、受動的な状態で自らを解放し、他者を感じるがままにしておくことによって、相手の感情を受け容れるのである。

自らを能動的に「投げ入れ」ることによる他者理解を原則的には否定する一方で、彼女は次のようにも述べる。「(母親は) 赤ん坊に自分を投げ入れ、そして、「自分ならおしめがぐっしょりぬれたら、どんな感じかしら」と問うのではない。こうしたことが行われるのは、自然な衝動がうまく機能しないときに限られる」(傍点引用者)¹³。すなわち、「自分ならどう感じるだろうか」と、いわば知的な類推によって相手の感情を推し量ろうとするのは、自然に相手の感情が感じ取れないときの二次的な手段にすぎないというわけである。

ノディングズがここで「自然な衝動」と呼ぶものが、ケアの作動の一要因となっていることは間違いない。これまでの議論を整理してみると、それは目の前の相手の感情を「感じ取ってしまう」という経験にはかならないのではない¹⁴。

それは他者を「認識」することではない。認識とは、私から対象へと向かう志向性であるが、ここで言われている「自然な衝動」は、他者から私へと到来するものである。ノディングズは別のところで、この衝動を他者から到来する「共鳴的な振動」(sympathetic vibration) と表現している¹⁵。このことを理解するためには、私たちが好むと好まざるとに関わらず、目の前にいる他者の感情を感じ取り、その感情に共振するように自己の感情が動いてしまう経験を思い起こすとよいだろう。たとえば、目の前の相手が「怒っている」ことを感じ取っている私は、無意識のうちに「怯えて」、体が「すくみ」「縮み上がる」¹⁶。

それは、私の意志に関係なく不意に私を襲うものであるという点で、私の充足性を脅かすものである。と同時に、紛れもなく「この私」に向って他者から発せられているベクトルである点で、「私」の存在を確かなものたらしめるものでもある。他者から向ってくるこのベクトルが存在するとき、私は、私を見つめる他者の存在を意識せざるを得ないし、その視線を通して浸透してくる他者の感情にも曝されている。

(3) 「視線触発」とケアの発動：まとめに替えて

事例1に戻って、ケアの発動が何に触発されているのかを考えてみよう。

園児Aからパトカーのおもちゃを貸してほしいと言われた園児Nは、一度はその要求を拒否する。断られたAはいったん諦め、それ以上の要求をせずに、少し離れたところからじっとパトカーを見つめている。ここには、ことばでのやり取りは存在していないが、視線の交錯が存在している。正確には、AからNへと向かう視線の存在があり、その視線を感じ取りつつ視線を逸らし、Aを無視する態度をとり続けようとするNの無言のアピールが存在する。Nは、Aからの視線を逸らすことで、おもちゃと自己との自足した世界にふたたび引きこもろうとしている。

しかし、先刻Aから声をかけられたことによって、Nの自足的な世界はすでに壊れているといえる。Nはこのおもちゃを媒介として、自分の領域に入り込んでくる他者の存在に気づいたのである。いったん自分の世界に他者が存在していることに気づいた以上、それを知る前の自己中心的な世界に戻ることはできない。Aから自分へと向かってくる視線に曝露されるなかで、Nは「応答」を求められ続けている。

もちろん、視線を「無視」し続けることもひとつの「応答」の仕方である以上、ここに必ずケアという「応答」が発動するとはかぎらない。しかし、その視線が他の誰でもない「この私」に向っているものであること、それに応えうるのは「この私」でしかありえないことは、関係の中ですでにNに気づかれているといえるだろう。

この「視線」による触発、他者から到来するまなざしへの「気づき」によって、プロセスレコードに記録できるような相互作用としては現象しないある種の「関係」が、AとNのあいだに樹立されている。それは、呼びかけに「応答」しうる資格を持つ者として、Nの責任主体が呼び覚まされる瞬間でもあったのではないか。そして、呼び覚まされた主体の意識が具体的な行動へと結実したとき、自発的なケアが発動するのではないか。

しかし、注意しなくてはならない。他者からの呼びかけによって、応答する責任主体が私の中に立ち上がるとしても、それはあくまで他者をケアする行動を「誘発」するにとどまるものである以上、私がそれを実際に行うかどうかは、私の決断にゆだねられているのだ。

ケアの触発それ自体、他者からの視線に気づくという、当人にとっても徹底的に受動的な経験によって起こる。したがってこの部分については、当人が他者から自分へむかう視線の存在に「すでに気づいている」か「いまだ気づいていない」かのいずれ

かである、としか言えないのである。だとすると、外部からのほたらきかけによって「他者の思い」に「気づかせる」ことは根源的には不可能なのではあるまいか。

本稿の事例でも見たように、外部からのほたらきかけによって、子どもたちが行動を変容させ、他人を結果的にケアすることは日常的に起こりうる。ここで問題にしようとしている「視線による触発」は、ケアが行為として結実するその「手前」の次元が存在することを示唆している。

次には、この「触発」と行為レベルでのケアの実現とを結ぶ原理の解明が必要であるが、すでに紙幅が尽きた。この問題は、別稿に譲りたい。

[注]

- 1 「プロセスレコード」とは、相互作用（interaction）分析の一手法であり、他者とのかかわりの中で自分が違和感や戸惑いを覚えた場面を事後的に想起し、そこで起こった言語的・非言語的相互作用を時系列に沿って再構成する記録様式である（山口美和「幼児の『経験』と保育内容—幼児のパースペクティヴ性の獲得を中心に—」【上田女子短期大学 幼児教育学科 保育者養成年報】第4号、2007年、55-63ページを参照）。本研究へのプロセスレコードの使用にあたっては、記録にかかわった個人が特定されることのないよう実習園名等の情報は伏せた上で、分析に支障がない範囲で内容に改変を加え、一定の年齢の幼児によく見られるケア行動として一般化した事例を示した。
- 2 ネル・ノディングズ著、立山善康ほか訳『ケアリング 倫理と道徳の教育——女性の観点から』晃洋書房、1997年、130ページ
- 3 ノディングズ『ケアリング』31ページ
- 4 ノディングズ『ケアリング』38ページ
- 5 このことは、ノディングズがケアリングの出発点を認識にはなく、他者の「受け容れ」に求めていることにもあらわれている。「わたしが他の人を受け容れるときには、そのひとと完全に一体となっている。…わたしは他の人を対象として捉えていないし、感じているものがある点で正しいのかどうかを自分に問い返しもしない」（ノディングズ『ケアリング』50ページ）
- 6 ノディングズ『ケアリング』、47-48ページ
- 7 ノディングズ『ケアリング』129ページ
- 8 この「倫理的なものを可能にする」という一文について品川は、「倫理的行為の

発生論的な必要条件」として解釈すべきであると述べている。つまり、あらゆる倫理的行為に先行して、「自然なケアリング」が存在している必要がある、ということである。品川哲彦『正義と境を接するもの—責任という原理とケアの倫理』ナカニシヤ出版、2007年、178ページ

- 9 ノディングズ『ケアリング』39ページ
- 10 ノディングズ『ケアリング』39-40ページ
- 11 ノディングズ『ケアリング』131ページ
- 12 Nel Noddings, *Caring : A Feminine Approach to Ethics and Moral Education*, Berkley : University of California Press, 1984, p.30
- 13 ノディングズ『ケアリング』、47-48ページ
- 14 なお、ノディングズの議論には、「自然な衝動」を、ケアしたいという「自然な欲求」と混同している部分が見られるが、恐らくこの二つは区別されるべきであろう。筆者が考えるに、「自然な衝動」が受動的なものである以上、ケアするほどのいかなる意思とも無関係に到来するはずであり、ケアしたいという欲求や意思は、「自然な衝動」が到来したのち、二次的に主体の内部に発生するものである可能性が高い。
- 15 Nel Noddings, *Starting at Home —caring and social policy*, University of California Press, 2002, p.14.
- 16 この他我理解の問題について補足すれば、マックス・シェーラーは、他者と私とが身体においても感情においても分離しているという一般的信念を問い直し、怒りや喜びといった感情が「直接に」与えられているという事実を示している。シェーラーの説は他者の感情は他者の身体の内部に秘匿されたものであるという前提を取り払ったものであり、「直接知覚説」と呼ばれるものである。これを引きついだカッシーラーも、他者の感情を、事物としての身体に見出すのではなく、むしろはじめから表情として表出されている現象に見出そうとする。他我認識の哲学的な議論の歴史については、斎藤慶典『思考の臨界』勁草書房、2000年、256ページを参照。
- 17 村上は、他者からの視線に気づかず、ゆえに他者に適切に配慮することができない自閉症児の経験を、現象学的に解明している。この中で、相手からこちらへと一直線に向かってくるベクトルの直感的な体験を「視線触発」と呼び、この触発が他者を理解する根本的な原理であることを示している。村上靖彦『自閉症の現

象学』勁草書房2008年。